



G
A M E

RCGS
立命館大学ゲーム研究センター
Ritsumeikan Center for Game Studies

Hitotsubashi University
Institute of Innovation Research



ゲーム産業生成における
イノベーションの分野横断的なオーラル・ヒストリー事業
EMERGENCE of Industry,
An Oral Historical Research Project focusing on Game Industry

岩谷徹第1回インタビュー前半：生い立ちから大学入学まで

生稲 史彦
井上 明人
福田 一史
金 東勲
中村 彰憲
鳴原 盛之
山口 翔太郎

Tohru Iwatani, Oral History (1st, 1): The Life History until the
Enrollment of the University

Ikuine, Fumihiko
Inoue, Akito
Fukuda, Kazufumi
Kim, Donghoon
Nakamura, Akinori
Shigihara, Morihiro
Yamaguchi, Shotaro

目次

生い立ち：家庭環境、秋田県秋田市での生活	3
小学校低学年：岩手県盛岡市へ引っ越す	6
岩手県から宮城県仙台市へ	8
幼少期の映画やテレビ	9
仙台での遊び：自作のゲーム、漫画	12
中学校時代：ピンボールに熱中	23
高校時代：生活環境の変化	29
大学受験：東海大学に入学	33

生い立ち：家庭環境、秋田県秋田市での生活

Q：では、基本的には僕のほうで全体をやりますけれども、皆さんのほうからも、適宜、質問があれば、よろしくお願いします。今日はよろしくお願いします。オーラル・ヒストリー、生い立ちぐらいから少しずつ伺っていきまして、今日はナムコに入られる前までぐらいまで聞けたらいいかなっていうふうに思っております。

岩谷：今日はナムコに入るまでですか？

Q：ええ。

岩谷：そうなんですか。分かりました。

Q：では、プリ・ヒストリーというところ辺りから。

岩谷：はい。

Q：1955年に、お生まれになった頃から、差し支えない範囲で、ご家庭のこととか、お父さん、お母さんのこととか、お伺いできればと思うんですけれども。

岩谷：1955年の1月25日に東京都の目黒区で、家で生まれました、産婆さんに引き上げられて。その後は幼稚園ですね。目黒区碑文谷にありますサレジオ教会の幼稚園というところですよ。幼稚園に行くと神父さんがいて、「グッドモーニング」とか、「アイアイサー」とか、英語的なことを話して。実はそれ以後、全くそういったところとは関係のない生活になるんですけども、ちょっと外国の人とも触れ合う機会が、その時、早めからあったなというふうに、今思うとありますね。

Q：お生まれになった地域はどちらなんですか。

岩谷：目黒区本町。目黒本町です。「本町（ほんまち）」と書いて「本町（ほんちょう）」。丁目とか、そういう細かいところはいるんですか。

Q：いえいえ。目黒区の本町？

岩谷：そうです。

Q：どんなお子さんって、自分で言うのも何ですけど、どんな感じでしたか。

岩谷：記憶がそんなにはないんです。ほんとに幼稚園で遊んだりとかしているぐらいで。むしろ、そこから父親の転勤で秋田県秋田市に行くんです。そこからアナログな生活をしていくんです。父、母、兄弟の話をちょっとしますと、父親が富山県生まれ、母親も富山県生まれで、戦後から東京に来て、父親がNHK、日本放送協会に勤めていて、私の上には兄と姉がいます。歳も言ったほうがいいですかね。

Q：はい。

岩谷：歳がなかなか出てこないですね。ちょうど8歳上と4歳上ぐらいですから、70歳の兄と、4歳だから66ぐらいの姉がいます。末っ子ですので、当然、甘えん坊というか、末っ子らしい性格とか育てられ方をしたと思います。長男には厳しい教育を、末っ子にはほったらかしみたいな、そういうような中で多分、育っていると思います。

その秋田に引っ越す前の幼稚園までの中では、ほんとうに教会で歌を歌ったりとかっていうシーンしか、あんまり思い出せないんです。あとは、当時の写真を見ると、家の前も砂利道で、塀も木でできた塀なんです。ですから、そういう中で土まみれになって遊んでいたんだろうと思います。

そして秋田市に移ったのが、これがその幼稚園の途中からです。ですから途中から幼稚園が変わったということで、秋田市の、今は大学名が違うと思うんですけど、秋田経済大学付属幼稚園というところに行きました。秋田市に移って、多分、都会と田舎でだいぶ違う生活スタイルで、幼稚園の子どもたちと一緒にいても、何の違和感もなくスッと入れる性格だったみたいです。環境が変わっても仲間になって入れるというような、その後のいろんな場面を見ますと、比較的スッと入れるタイプだったと思います。そこに、また小学校まで上がるんですけども、これも1年半、秋田には1年半から2年ぐらいしかいなかったと思うんです。2年いたのかな。幼稚園、小学校1年…。そうですね。小学校1年ぐらいまで。小学校1年。小学校入ってますからね。小学校1年半ぐらいまでですね。

その時に、「パックマンのゲーム学入門」にも書いてあるんですけども、肥溜めっていう存在を知らなくて。雪が降っていて、雪景色の、多分、畑でしょうか。かくれんぼみたいなことをやっていたので、かくれんぼで、雪でちょうどへこんでるところがあるので、「これは中に入って隠れちゃえ」というので入りましたら、そこが肥溜めだったということですね。たっぷり母親に怒られたというか、あのままブクブクと沈んで行くんじゃないかって。大人の人が近くにいて助けてくれたらしいんですね。この本では、そういうトラップに引っ掛かるということを体で覚えたというか、トラウマになったというか、そういうことからゲームの中のトラップ、要するにゲームはいろいろな仕掛けやトラップがありますので。ゲーム作りの原点はそこからあるんじゃないかっていうふうには、気付き的なことを記述しているんですけど。あと周りが山や草原やら、中古の、ほんとに東京にはない

ような車の残骸のような荒廃した場所とかがあるんですね。

戦後10年はたってるはずなんですけども、まだ秋田市の一部や、河原の近くとか、そういうところはまだまだ整備されてない、いわゆる復興してないような様子が、その壊れた車をそのまま放置してるとか、残骸、建物の壊れたものが放置されてる。初めてそういうのを見て、何か「あー」っていう気持ちは持った記憶があります。後は、山遊び、草っ原遊びが非常に面白かったという記憶がありまして。草原っていうのは、草がいっぱい生えたときに草を上で結んで、要するに足を引っ掛けてっていう、そういうような、これもまたトラップですね。そういうような、やっぱりアナログの中のトラップといいますか、あるいはその仕掛けとか、いろいろな遊びにつながるような材料があったので、この辺の経験も、その後のゲーム作りの中には、随分役立ってるんじゃないかなとは思いますが。

先ほどの砂利道という、目黒の砂利道もあったんですけど、庭なんかは当然、土ですよ。土っていうのが、雨が降れば軟らかくなったりとか、傾斜があればビー玉を転がすみたいなこととか。いま現代の都市部っていうのは、なかなか土の面を見るっていうのは、なかなかないですよ。そういう意味で、土で軟らかくなったところに釘を刺すっていう。大きめの釘を思い切り地面にやって、釘を刺して、その毛糸みたいなものを巻いて障地を取っていくというような。またビー玉も転がしたりとか。その辺はパチンコではなくて、スマートボールじゃなくて、コリントゲームみたいな、そういうような遊びを土の上でやりました。こういう木の板でやるんじゃないかと、土の上で釘を刺してビー玉を転がして「カン、カン、カン」ってなるような。それから毛糸でこうやって。釘を刺して毛糸で囲みを作るっていうのが、後々、「リブルラブル」のゲームの原点にもなってきます。

この話は、任天堂の宮本茂さんともしていて、いろんなところでも話してるんですけども、「やっぱりアナログ遊びっていうのが、いろいろなゲームの素材を身体に植え付けてきてたんで、それを大人になって吐き出して、ゲームにしてるんです」って、そんな話をした記憶があります。そういうような話とか。それから秋田ですから、かまくら作りですね。かまくらを作って、いわゆる秘密基地が雪でできちゃう。それで、穴を掘って、明るくしてる写真とか映像を見てたと思うんで、とにかくあれを再現したいという思いで。こうやって、中を掘って、中が何となく明るくなって、雪でできたあれだけでも暖かい。で、なぜかそこでラーメンが食べたいと。何か分かんないんですけど、そこでラーメンを食べたいと思って、母親に言ったんですかね。あの時まだインスタントラーメンとかなくて、取ったような気がしないでもないんですよ。

Q：出前を取ったんですか？

岩谷：出前を。あの頃、やたらに美味しくて、ちゃんとしたどんぶりだった記憶があるんで。今でもラーメン、必ずどこかでラーメンを探し回るんですけども。どうしてもあそこでラーメン食べたいということで、それを実現したという記憶があります。

Q：それは小学校1年生ぐらいまでの？ 今のは。

岩谷：そうです。1年。2年ですかね。多分、2年の半分ぐらいだと思います。2年の半分からは今度は盛岡の話になってくるんですけども。

小学校低学年：岩手県盛岡市へ引っ越す

Q2：秋田市から盛岡市に引っ越されたんですか？

岩谷：そうです。NHKの地方局が随所にあリまして、そこへ父親が。父親はどちらかというとなHKの中ではエンジニア、技術系の職種で、放送局の無線、第1種無線何とかっていう資格を持っていたんで、その資格のある人が放送局を立ち上げなきゃいけない。その放送局の立ち上げでやって。で、放送局が立ち上がったんで、今度は盛岡へ行ったんですよ、多分。そういうような形で、その後、後々また仙台にも行きますので、東北を縦断するよなというか。比較的、小学校6年までは東北育ちみたいな、そんな感じです。

秋田では雪というものと、まあ自然ですよ。友達関係もそんなに何の抵抗もなく遊んでたと思います。盛岡に移ってから、盛岡では上田小学校という名前。去年の初めに盛岡市で、別の関係の「特濃ゲーム開発塾」があつて行きました。吉岡直人さん、多分ご存じですよ。

Q：はい。

岩谷：開発塾をやられてるってことで、「盛岡でやるんだ」と言うから、「いや、僕そこにいたんですよ」と言つて。会場の人たちにも、ちゃんとパワーポイントで地図出して「この上田小学校にいました」と言つて、やっぱり皆さんも親しみを感じてくれて、話がスムーズに行くようになりましたけども。

盛岡が、これまた海のほうに行けば宮古の浄土ヶ浜があつて、山のほうに行けば小岩井農場があつてというような、非常に今度は行動範囲が広がるわけです。親に連れられていくわけですけども。そういう中でダイナミックに自然を取り込んだ、と。見れば岩手山という、ほんとに富士に、富士山に似てるんですが。その岩手富士がパーッと見えて、要するに視野がダイナミックになってきましてね。秋田はどっちかというとな生活圏の中での視野なんですけども。盛岡に行くと、牧場であつたりとか、岩手山であつたりとか。それから盛岡市の住んでたところの社宅なんですけども、秋田も社宅ですね。社宅なんですけども、隣が岩手大学の何か農学部さんか何かですかね、うっそうとした森が近くにあるんです。社宅の前が田んぼで、田んぼの先が森になっているという。その森からカッコウの音が聞こえてきて、ほんとに自然の中にいたという感じで。田んぼを抜けて空を見上げる

とアカトンボがいっぱい飛んでる風景なんかを覚えています。

ここでもやっぱり野山で遊んでたというので、家遊びはほとんどしてない。家で遊んでる記憶がないです。外で遊んでると。その辺から、ちょうど幼なじみみたいな人たちができるのですが、幼なじみの人っていうのは社宅の子どもですから、同じ NHK の社員の子どもの、その人たちも、結局、東京に戻ってくるんです。あるいは仙台に戻ってきたり。そうすると、「あれ、また一緒だね」という、そんな感じの形で幼なじみが住んでいたんです。あと兄と姉とは、特に遊ぶっていうことはないです。父、母からも、いわゆる教育的なというか、「勉強しなさい」とかっていうのも特にない。まあ言われてたのは、兄、姉のほうです。ですから私のほうは末っ子特有の遊び放題という形で来ました。ペットも飼ってないですね。

Q：先ほど秋田ではコリントゲームみたいなことが、岩手では印象に残っている遊びとかは何か？

岩谷：岩手では、虫取り網を持って、要するに、よくあるランニングシャツを着て、網持って、何か麦わら帽かぶって駆け回ってたという感じです。虫が好きですね。虫取りです。アリとか、大きな石を引っくり返している虫を見たりとか。縁側に横になって庭の地面のアリを見てるといような、観察といのか。ですから、大人になってから兄弟とか母親から言われるのは、「あなた、いつも寝っ転がって庭を見てたね」と。庭というのは、私は虫を見てたんですけど。それかあるいは虫を捕まえに行くかといような感じですね。東北のほうですから、カブトムシとかあまりなくて。クワガタぐらいですよ、いたのは。あとは、田んぼのあぜ道の小さい川の中でのタニシであるとか、そんなようなものとか。あの、ぬるい水を覚えてますね。春にかけて。あ、夏ですか。雪解け水だと冷たいから、夏ぐらいだと思います。「ほんと生ぬるいな」という記憶です。タニシか何かを取っているような。

そこでも 2 年ぐらいですかね。(小学校) 3 年、4 年から、仙台市に移るんで。なぜこれはあまり詳しくないかっていうと、やっぱり……。仙台市が比較的長くて小学校 6 年生までいましたので、2 年半だとすると、3 年半いたんですかね。

Q：3 年生の途中ぐらいで移って？

岩谷：そんな感じです。

Q：岩手では 1 年ぐらいか、2 年まではない感じですか。

岩谷：盛岡は 2 年ないです。1 年半。ひょっとすると秋田は小学校 1 年ぐらいですかね。盛

岡が、まあ1年で…。秋田は、だから幼稚園を含めて1年半ってことで、盛岡が小学校だけで1年半という感じで、で、仙台に来て、そうするとまた行動範囲が、自らの行動範囲が広がっていくわけですけども。

岩手県から宮城県仙台市へ

岩谷：こういう話でよろしいのでしょうか。

Q：はい、ありがとうございます。いつもこういう感じで聞いています。話しくいかもしれませんが、で、仙台にいらしてからはどんな生活をされていたんですか？

岩谷：仙台来て一番記憶にあるのが、初期の頃なんですけど、盲腸になったんですけども。この「盲腸だ」という診断が遅れて、自家中毒だと最初は町医者に言われて。で、自家中毒だから何か適当に薬でも飲んだんですかね。中で破裂しちゃったんです、盲腸が。ですから緊急入院みたいな感じで、長く。どのぐらいですかね。3週間半か、あるいは4週間か。3週間から4週間、東北大学病院ですね。東北大学病院に入院して。で、中を切って破裂しちゃったものを取り出して、しばらく何か管を入れてるんですよ。縫わずに。縫わずに少し縫って管を出して膿を吸い取るといいますか。そういう形で管が出て、毎日注射をしてました。そこで、大学生みたいなお兄さんがお医者さんの助手をしていて。何の期間ですかね、ドクターの。

Q：インターンとか見習いの頃ですかね。

岩谷：インターンですかね。そのお兄さんのような先生のような人と仲良くなって、お兄さんたちはお金があるのか何か知らないけど、車で海まで連れてってくれたんです。松島のほうです。入院中の後半戦ですけど、もうだんだん治りかけていて。その時の印象としては、大学生のような、お医者さんのような、そういうシステムがあるんだなということが分かって。その辺から、いわゆる小学校、中学校、高校の先の、大学生の仕事というのが見られたというか。それを見るまでは、そのお兄さんたちと行くまでは、発想は小学生止まりなんです。小学生までで、それ以降のことは想像できないという。そういうようなことを見られて。兄とか姉がいたんですけども、まだ中学校で。高校ですかね。あまりこうよく分からない。その先の仕事っていうところまでは、とてもあまり結び付いていませんでした。

Q：ずっと小学生のイメージ？

岩谷：自分はこの先どうなるんだろうという考えが、小学生の6年生止まりなんです。

Q：その辺りから、将来のことをちょっとお考えになったということですか。

岩谷：そうです。将来っていう、「ああ、こういうふうに、段取りがあるんだ」という。その辺りから、「将来何やりたい」とかって小学生のときによく書かされますよね？ そういうときには電車の運転手です。電車の運転手になりたいと。これは、もうずいぶん思っていましたね、中学校ぐらいまでですかね。ですから、電車に乗ると前に行っていてというタイプで、当時は。そこから国鉄スワローズがプロ野球のファンになったと。国鉄ということですね。関西では南海とか近鉄とかあったんですけども、関東のほうは球団が読売新聞だとか。

Q：映画会社とかですね。

岩谷：ええ。当初は。電鉄系がないので。東京のほうだったんで、生まれが東京だったんで、巨人ファンにはならず。東北だと、多分、巨人ファンのほうが多いんだと思います。やっぱり電車が好きだっていうことで、単純に東北にもある国鉄ということで、国鉄スワローズのファンになって、私はもう五十数年のスワローズファンで、今でも球場に緑のメガホンを持って行っています。

Q：そうするとあれですか。大体、小学校の4年生、5年生くらいですか。時期、ファンになった頃というのは。

岩谷：ファンになったのは多分、そうですね、4年生ぐらいですかね。

幼少期の映画やテレビ

岩谷：それと、あと記憶に残ってるのは、4年生、3~4年生の時に、急に母が「映画を見る」って言うんです。「行こう」って、俺を連れてって。1人で映画なんかは見てたのかな、あるいは何か夫婦げんかでもしてうっぶん晴らしに行ったのか、それは分かんないですけど。私を連れて映画館に行ったんです。その映画のタイトルが「馬鹿が戦車でやって来る」っていう、ハナ肇が出ている映画で。これは「男はつらいよ」の監督。

Q：山田洋次ですね。

岩谷：うん。この映画の脚本かな、監督かな。山田洋次が。後々見たら「あ、山田洋次の作品だ」って思ったんです。それは面白かったんです。戦後、納屋の中に隠された戦車、戦時中の戦車が1台、誰にも分かんないように小屋っていうか納屋のほうに隠されていて、

頭のちょっとおバカさんが、主人公のハナ肇がそれを動かしちゃって、村で騒動が起こるという。まあ山田洋次らしい。それで皆さんご存じだと思いますけど、小学校4~5年になりますと、「コンバット！」とか、戦争系のテレビドラマとかあって。戦車とかミリタリーのオタクではなくて、みんな結構、戦車をプラモデルで作ったりとかするので。

後は、タンクですかね。「馬鹿が戦車（タンク）でやって来る」っていうのが、戦車だから面白かったんですけども。そういうところからドイツ軍の兵器はカッコいいなど。タイガーにしても、ロンメルにしても。その辺りと、シャーマンや何かに比べるとドイツのほうがかっこよくて強いっていうような、その辺の構造物のかっこよさとか、強さだとか、性能・機能とか、そういうところに興味を持ちました。今も何かガチャンとかやって、道具をカチャカチャと変えたりするのは一緒で、やっぱり男はこういうのが好きですから。兵器の威力の違いですよ。バズーカ砲というのは小回りの利くあれだし、そんなような破壊力の違いとか。後は手りゅう弾（しゅりゅうだん）とか手りゅう弾（てりゅうだん）とかっていう。われわれ、手りゅう弾（てりゅうだん）って言ってたのかな。手りゅう弾（しゅりゅうだん）のことですよ。あれなんかも、ドイツのはカッコ悪いなと思いました。筒で投げにくいだろうなと思って、丸いほうが理に適っているなっていうような考えで、そんなようなことを思ったりとか。

Q：当時テレビは、お父さまがお勤めなので、やはり持ってらっしゃったんですか。

岩谷：そうです。ありました。仕事柄ですから。

Q：それは一般的にみんな持ってるという状況でしたか。

岩谷：まあ、社宅ですからね。

Q：社宅はNHKの社員の方が集まってる場所だったってことですね。

岩谷：そうそう。他のおうちに行って、あるなしなんて確認なんかしないですからね。昼間ですから、夕方の団らんの時に行かないですから、分かんないですね、テレビがあったかというのは。ただテレビの、小学校高学年になったり、中学生。中学生になると東京なんですけども、見れる番組が当然NHK中心、見る番組がNHK中心なんで、まずニュースだとかっていうんですね。

大人になるとニュースばかり見ちゃうんですけども、それは大人になって分かるんですけども。「ニュースの何が面白いんだ」という気持ちで。「コンバット！」は父親も母親も、ドラマとかがちゃんとしっかりしてるので見られるんです。2人の俳優も有名ですよ。皆さん、「コンバット！」はご存じではない？

Q：僕でギリギリですね。

岩谷：サンダース軍曹とヘンリー少尉。あのヘルメット、白黒なんですけども「コンバット！」のオープニングで、何か爆発する絵が出るんですけど、それがドット絵なんです。バーッと爆発したようなドット絵になってるんですけど、ドット絵の起源はそこですね、私の中で。脳裏にドット絵で、当時は何かギザギザしたもので画家が表現しているっていうことに、ちょっと「おや？」と思って、記憶に残ってるんですよ。それは「コンバット！」の始まりのシーンに必ず出てくるんです。

Q：やっぱりニュースとかが中心で、後は野球とかですか。

岩谷：野球は見ないですね。

Q：見てなかったんですか。

岩谷：ええ。父親がタイガースファンで、巨人戦しかやってないし。

Q：じゃあ巨人対阪神のときは見るけどもって感じですか。

岩谷：そんな感じですよ。

Q：学校で、じゃあ同級生と「昨日のテレビ何見た？」みたいな話題にはならないわけですか。

岩谷：そうですね。野球の話はまずなかったです。「コンバット！」とか、それからディズニーのアニメーションのやつとかです。だから最初にシンデレラ城が出て、「あ、これからディズニーのアニメが始まる」というのは、すごい楽しみにしてました。比較的アニメは見ましたね。「オバケのQ太郎」とか、「鉄人28号」とか見て。ちょっと中学校とダブるかもしれないですけど、「エイトマン」とか、後は「少年ジェット」の記憶もあるな。

Q：学校だとやっぱりそういう話になるんですか。

岩谷：そうですね。だから日曜日の朝っていうのがアニメの時間帯なので、朝早く起きてそれを見るっていうのが楽しみの一つだったですね。「狼少年ケン」なんかも、そんなような。そういう話をしてますよね。それが終わると「新日本紀行」とかいうのが始まっちゃって、親が占領して。

Q：NHK ですからね。「新日本紀行」ですか。

岩谷：それを見始めるというような。後は「兼高かおるの世界の旅」とか、そんなようなやつは見ていました。

Q：日曜日の当時の王道ですよ。

岩谷：そうです。

Q：60年代、70年代ぐらいまでの。

仙台での遊び：自作のゲーム、漫画

岩谷：小学校4～5年からですか、家で自分でゲームを作るという。このぐらいの大きな紙にダービーレースみたいな。コースがいくつかあって、それが楕円形になっていてコマを進めるだけのダービーゲーム。サイコロを使ってコマを動かして、いくつか戻るとか、そんなようなことを書いて、早くゴールした人が勝ちというような、オリジナルといっても、ほとんど世の中にあるようなものを作ったりとか。あるいは、ほんとにグルグル、グネグネした、すごろく系のゲームだとか。そういうのをやったりとか、あとは当時流行ってた、いわゆる盤ゲームですね。バンカースとか、ダイヤモンド型の何か色のこういうやつ、ありますよね。

Q：駒を、向こうの陣地まで動かしていく対戦ゲームの？

岩谷：そうそう。

Q：ダイヤモンドゲームですね。はい、ありますね。

岩谷：後は、グルグル、グルグル回って、真ん中で上がんなきゃいけないやつがあったんですけどね。そういうような盤ゲーム、市販の盤ゲームをこうやったりとか、後は定番の野球盤をやったりとか。ですからこの辺から家でもかなりアナログゲームを、市販のものを遊ぶのと簡単なオリジナルゲームを作って遊ぶという感じですかね。

Q：盛岡にいらっしゃった頃までは結構、外遊びで。仙台に来たら何か急に家遊びの話が増えた気がするんですが。

岩谷：そうです。仙台で、やっぱり一応、東北で一番大きな市なので、比較的、街なんですよ。ですから外の自然の中で遊ぶには電車で行かないといけないような。あるいは、うちはずっと車がなかったのが、仙山線という、仙台と山形を結ぶ仙山線に乗って、山を越えない範囲のところまで行って、何か山で遊んだりとか、キノコを取りに行ったりとか、そんな感じになります。あとは仙石線といって、仙台と石巻の、あっちの海の方に行って、松島行ったりとか。そういうような感じで、自然に触れに行くには大人の足を使うという、そんなような。

Q：先ほどの大学生の方の話も、やっぱりそういう中で、貴重というか。大学生の。

岩谷：そうですね。仙台の盲腸の時のね。

Q：はい。「大人になったら車で海に行くんだ」って。

岩谷：そうそう。車のない家だったので、車に乗るってことが非常に珍しい機会ですから。いわゆる自家用車ってというのは、その当時は珍しかったですね。

Q：そうですよね。車に乗れるっていうと特別な日。

岩谷：そうそう。特別な日。

Q：電車じゃない。あと、その遊びが街になったから変わったっていうのと、もう周りの子どもも、やっぱりそういうふうには？

岩谷：そうですね。

Q：家遊びをやる仲間だったんですか。

岩谷：そうです。あとは、運動会とかリレーの大会とかですね。足が速かったんで、リレーの選手になったりするんですけども。兄姉、姉も速くて、足が速くて。学年で1番ぐらいに速いと大会に出るんです。そうすると市の大会に出て。県の大会までは多分行ってないと思うんで、市の大会ぐらいでアンカーになったんで、それが東北の新聞に載って、豆粒のような俺が走ってるのを見て「写ってる」と母親が喜んでたっていうのは記憶があります。

Q：小学生で新聞に載るのも少ないですよ。

岩谷：あと、社宅がNHKの人たちで、アナウンサーもいるわけです。テレビの交通事故の番組で、「どうして交通事故が起こってしまうんだろうか」っていうことで、年配の人たちと子どもたちをスタジオに呼んで何かやる番組で。「信号を守らない」とか、そんなようなこととかがあって。その社宅のアナウンサーの人が、「子どもたちに聞いてみよう」と言って、僕が手を上げると、僕のところにちゃんとかう、やってくるんです。で、僕がそこで「車と車の間が狭いと駄目だ」っていう、何か車間距離のことを言ったらいいんですよね。

それで放送されて、あれは中継じゃないから、その放送された翌日に小学校で校庭で遊んでると、「昨日出た人だ」って指を差されて。要するに、テレビに出るっていうことの、「出るとこうなるんだ」っていうのが直に分かりました。テレビデビューですよ。

Q：テレビデビューはちなみにいつ頃なんですか。

岩谷：小学校5年。僕が驚いたのは、その翌日に知らない人に「あ、昨日テレビ出た人だ」って指を差されたという。「ああ、すごいんだなあ」と。テレビの影響力すごいっていうのは。その時はメディアとか言わないですよ。

Q：テレビの影響力ですね。

岩谷：テレビってすごいんだなって。

Q：その自宅で遊ぶタイプのゲームをやってらっしゃったということですが、それはやっぱり友達と集まってやっていたんですか。

岩谷：そうです。集まって。自然とどこかの家でっていう。

Q：やっぱり、そのゲームはそれぞれが別のものを持ってたりしてっていうことですか。

岩谷：何か自分ちでしか遊んでなかったような気がするけどな。

Q：じゃあわりとさっきの野球盤とかダイヤモンドゲームとか、わりと買ってもらってたりはしたんですか。

岩谷：野球盤はどうにか買ってもらったかな。あんまり「はいよ」っていうふうに買ってくれる家ではなかったんで。

Q：誕生日とか、お正月とか？

岩谷：そうですね。あと無性にトランシーバーが欲しかったですね。今、携帯で皆さんやっていますけども、遠く離れたところと通信できるっていうのは、もう夢のようなもので。トランシーバーは当然コンパクトで無線通信しているものですから、離れてても何か話し合っただけのきっかけをつかめるわけですよ。そういうところの憧れっていうのはありました。トランシーバーが好きで、欲しくて欲しくてしょうがなくって。当然、買ってもらえないんですけども、一生懸命、懸賞出していましたね、トランシーバーが当たる懸賞。

Q：小学校何年生の雑誌とかによく載っている懸賞ですね。

岩谷：そうそう。あれを出していました。

Q：懸賞、小学校何年生とかですか。漫画雑誌とかではなく？ どんないちを讀まれてたのかなど。

岩谷：サンデーとかマガジン讀んでたかな。讀んでたな。買つてはないですよ。漫画雑誌よりもテレビのアニメが多かったですね。でも、「おそ松くん」って少年何とかに載つてたんですよ。アニメだけじゃないですよ。でも本を買つてことはないんです。友達のところで見てるんですよ。

Q：後はどうですか。仙台とかは貸し本ビジネスとかってあったんですか。

岩谷：あ、その通りですね。貸し本が、その盲腸の入院の時にあるんです、貸し本が。それは多分、タダだと思うんです。入院してる人が暇で見ると。そこで「カクン親父」っていうやつですね。滝田ゆうという漫画家。

Q：滝田ゆうですか。

岩谷：ええ。「カクン親父」で滝田ゆうっていう名前を覚えて、後はロボット何等兵とか。

Q：三等兵ですか。

岩谷：三等兵ですかね。そんなような貸し本、借りてはないんですけど、そういうような単行本の漫画を見る機会がありました。アニメーションでは、後は「トム&ジェリー」とか。「パックマン」の中に出てくるパワーエサ、パワークッキーの逆転するっていう発想

は、やっぱり「ポパイ」のアニメーションのハウレン草ですよ。

ですから、そういうことと、パックマンとモンスターのは、敵ながらそんなに殺し合わないとか、憎めない。「仲良くケンカしな」という「トム&ジェリー」とか、その関係性っていうのもあったからこそというところもありますし。あと、このオバQに似ているモンスターも、やっぱりオバQのキャラクターに影響を受けたフォルムですよ、ざっくりとした。あと、「キャスパー」の影響もあると思うんですね。そういう意味で、アニメーションとか漫画っていうのは、非常に後々のいい材料の仕込み時だったということですかね。

Q：当時は、やっぱり社宅っていうのは、いわゆる団地みたいなところですか。

岩谷：いや、平屋です。

Q：平屋ですか。じゃあ平屋文化だったんですね。

岩谷：そうです。盛岡も平屋です。

Q：いずれも平屋ですか。

岩谷：そうです。秋田はちょっと変わった、1階、2階の四角い建物がこうあって、1階、2階が1つの世帯という感じの。

Q：ただの2階建てではない？

岩谷：ちゃんとしたコンクリートの、いわゆるマンションの1階、2階を所有するような感じの、四角い。今はあんまり見ないですかね。

Q：1、2階が1軒、2軒みたいな、ありましたよね。

岩谷：昔、流行ったんですね。

Q：周りの人は、やっぱりその社宅の人が多くて？

岩谷：いえ、社宅はもう、仙台なんかは特に町の中のあるL字型の一角です、10軒ぐらい。後はもう普通の。

Q：他と比べて生活レベル、裕福さってというのは、どうですか。

岩谷：あまり分かんないっていうか、感じなかったです。ただ、まだ戦後の名残があったんです。いわゆる小学校と社宅の間は10分ぐらいなんですけども、やっぱりそこには立ち入っちゃいけないような、掘っ立て小屋のようなところで住んでる人がいました。今思うと何か戦後を引きずってるような感じの。駅にもまだいましたもんね。何でしたっけ、包帯巻いて。

Q：傷痍軍人（しょういぐんじん）ですか？

岩谷：そう、傷痍軍人。いわゆる「お金ください」というね。だからそれは中学校の時も、東京戻ってきて中学校の時もいましたから。やっぱりまだまだ戦後を引きずっているんだなっていうのは思っていました。

Q：お母さまは専業主婦ですよ。

岩谷：そうです。そうです。ずっと専業主婦です。

Q：そしたら、いつも帰ったら居る、みたいな感じですね。

岩谷：そうです。

Q：結構さっきのご質問でも、いろいろおもちゃが買ってもらえるんじゃないっていう意味で、豊かじゃないかなって勝手に思ったんですが、なかなかいつも買ってもらえない時期じゃないかなと思うんですけど。

岩谷：そうですね、買ってもらえないですよ。ですから、そのときは自分で自作するっていう感じです。

Q：特にそのダービーゲームとか、すごろく？

岩谷：そうです。

Q：家でやってた記憶が大きいって話ですけども、それはやっぱり友達がすごく集まるコミュニティだったみたいなことなのか、それとも1人で結構ずっと触ってるみたいなことだったのかってというのは、どうですか。

岩谷：1人で遊ぶっていうのは、ないですね。

Q：やっぱり誰かと集まるという？

岩谷：ええ。あとはスケートです。スケートとか、スキーに行って。東北ならではの、雪のシーズンのスポーツを。まあほとんど独学ですね。スケートとかスキーも、誰かに教わるとかではなくて、スケートリンクで見よう見まねで覚えるような、そんな感じですかね。でもちゃんと滑れるようになって。

あとは、縄跳び検定みたいなのがあって。走るのは強かったし、野球とかサッカーもやったしで。縄跳び。要するに、クロスの二重飛びを何回かやれとか、この二重飛びはもう当たり前だって、クロスの二重飛びを20回以上やったかな。

Q：うちの田舎ではムササビって言ってました。

岩谷：それで、その何種類かのやつを全部クリアすると、最終合格。

Q：ありますよね。

岩谷：朝、練習するんですよ、庭で。そうするとトタトタうるさいですから、朝早くで。そういう本当に必死になって努力したっていうのは、唯一これだけなんですよね。人生の中で何か努力したなっていうと、それしかないな、と。ほんとに合格したいっていう、全部クリアしたいっていうことですね。何か課題を全部クリアっていうのが、一つのこれがまた一種のゲームにつながるかもしれないです。

Q：面白いですよ、それ。うちの田舎もありました。毎年、縄跳び大会ってあったので、まさに同じ感じですよ。全部できたら特級とかもありました。

岩谷：そんな感じですね。

Q：縄跳びっていうのは、何かブームみたいなものだったんですか。

岩谷：いや、縄跳びを普通にやる…。でも結構やりましたね、みんな。その検定目的じゃなくて。

Q：体育の授業とかでもやってたんじゃないですか。

岩谷：ありますね。

Q：ちょっとローカルなブームみたいな感じですか。全国的に何か、流行ったとか、そういうことではなかったですか。

岩谷：全国的じゃないかな。ああいうのって、結構、文部省というか、あの辺の指導でやりますから。道具としてもそんなにお金のかかる道具じゃないので安いですよ。

Q：僕も小学校の時に結構、小学校の授業で3～4年生の時に縄跳びがあっって、それを検定も含めてあっって。ありましたよ。3重跳びとかもやりましたし。

岩谷：3重跳び、あつた？

Q：はい、できました。その授業をきっかけに、結構、遊びでもやるようになるっていうのは、僕の経験上そうです。特に女の子はずっとやってたかな。

岩谷：そうですね。

Q：男は他の遊びをまたいろいろ覚えるんだけど、みたいな感じはあつたかなと思いますけど、でも結構やってました。

岩谷：男女交えて遊ぶっていうのはないですね、考えてみると。

Q：遊ぶときは男の子だけ？

岩谷：そうそう。発想としてなかったです、男女で遊ぶっていうのは。

Q：共通で遊ぶものって、ないですしね。まだゲームセンターとか、全然ないわけですよ、仙台でも当然。東北では都会ですけど

。

岩谷：時期的にないですよ。

Q：時期的には駄菓子屋さんとかですか。集会所的な。

岩谷：そうですね。駄菓子屋は好きでしたね。駄菓子屋が命みたいなのがありましたの

で。くじが得意だったんですよね。

Q：何のくじですか。単なるくじですか。

岩谷：箱があって、ピコッとやって中を開けて、いいやつはどれかとか、あと紙 1 枚取って、ペロツとなって、「スカ」と出る。「スカ」は駄目なんですけどね。何かお店のものを、当時、5 円とか 10 円でやりますよね。「お店のものを 100 円買っていい」というのを当てちゃったんです。そしたらもうすごいわけです。

Q：特等ですよ。

岩谷：そういうようなことからギャンブル系が好きになりましたよね。ギャンブル系っていうか、そういう「当たる」、「外れる」ということが好きになって、その辺りから中学校のピンボールとかが入ってくるかな。偶然性のやつを楽しもうとするっていうところですね。

Q：その前のすごろくって、偶然性、まあまあ、サイコロがありますけど、あんまりガンと出ないですもんね。

岩谷：そうなんです。

Q：クジのほうが出ますか、当たり、外れで。

岩谷：出ます。

Q：結構じゃあ、ほんとに外でも家でも夏も冬もずっと遊んでる感がとてもするんですけど。失礼な言い方ですけど。

岩谷：そうですね。何せ「勉強しろ」と言われたことがないので、ずっと勉強しなかった。

Q：習い事とかは？

岩谷：習い事もないです。

Q：クラブ活動とかは、当時、なかったですか。

岩谷：クラブっていうと、小学校の時は陸上部です。

Q：陸上部ですか。さっきリレーの話がありましたね。速いほうだったんですか。

岩谷：学校で1番。今からは考えられないです。

Q：いえいえ。

岩谷：ほんとに。いや、みんな言うんですよ、「全く考えられない」って。やっぱり遺伝子、継ぐんですよ。だから私の息子と娘も学校のリレーの選手で、速いのは遺伝でつながるんだなとかって思います。

Q：陸上部っていっても、こういった練習とか、当時だと？

岩谷：担任が体育の先生だったので、今ではやっちゃいけないウサギ跳びと、後は「水飲むな」と。

Q：そういう時代でもんね。スパルタの。

岩谷：もう「水飲んじゃいけない」って。

Q：それは小学校の時ですか。

岩谷：そうです。本当に飲みたくて、飲みたくて、しょうがなかったですね。

Q：それは、その部活は何年生ぐらいから。ずっと高学年ですか。

岩谷：6年までやったと思いますけどね。あとは、ちょっと足を運ぶと射撃訓練場があったんです。警察だと思えるんですよ。山を削って土の面が出てて、手前から撃っていくというところがあって。休みの日っていうか、全く射撃練習をしてない日に、土壁に撃ち込まれた弾を掘りに行くっていうのは、楽しかったですね。鉛の弾なんですけども、鉛の弾に銅ですかね。普通の弾の鉛のやつと。

Q：拳銃の弾って、そうやって作りますよね。鉛が地に入ってて、銅でコーティングして形を付けて。

岩谷：そうそう。そのタイプと、鉛だけみたいなのがあって。それが山を削ったら土の中に、掘ると出てくるんです。それを拾ってきて。その中には、いいものと悪いものがあるんです。

Q：きれいなものと、形が悪いもの。

岩谷：そうそう、それが。きれいなものはレアですから、ですから今のゲームのアイテムですよ。

Q：探索を。

岩谷：アイテムを拾って、いいものを見つけると、レアですから、「おお、いいな、いいな」って言って。

Q：これはみんなと行くんですか。

岩谷：そうです。

Q：土を掘って、「俺こんなの見つけたぞ」なんて言って。

岩谷：そうです。

Q：その射撃場っていうのは、やっぱりその当時も使われていたところですか。

岩谷：使われていました。休みの日にわれわれが行ってたんでしょうね。

Q：そんなとこ、入れるんですね。

岩谷：入れたんですね。

Q：今だったらほぼあり得ないくらい。もうちょっとセキュリティがある感じですよ。

岩谷：ですよ。

Q：休みの日って言われてもね、拳銃の弾を撃つところですよ。

岩谷：そうそう。

Q：いろんな遊びを考えたんですね。失礼なことですけど。

岩谷：あと、温度を…。お風呂のお湯に入れると軟らかくなるプラスチックみたいなゴムのようなものがあるって、それでフッと上げて冷ますと固まるんです。そういう温度によって形状が変わるっていうか、硬さが変わって、形が変えられて、自分なりに何かいろいろ作って楽しんでました。だから粘土系とかそういうもので何かブタみたいな動物のを作ったりとか、ちょっと兵器みたいなのを作ったりっていうのはやってました。

Q：さっきの土もそうですけど、形を変えたりして新しいもの作るっていうのは、結構小さい頃から好きだったっていうイメージなんですかね。

岩谷：そうですね。昔のいわゆる泥んこ遊びとか土団子みたいなのは嫌いじゃなかったですよ。結構きれいに仕上げていたと思いますよ。最後ちゃんと粉をふくというか、粘りがないように砂でやったり。

Q：ない人は、ほんとにないですね。土団子を作ること。

岩谷：後々なんですけど、指輪を、こういう指輪を作ったりとか、削ったりとか、やすり掛けたりとか。あと平面スピーカー作ったりとか、そういう工作系は好きでした。結構ディテールにこだわって、削りを掛けてきれいに仕上げないと嫌だなんていうのがあります。

中学校時代：ピンボールに熱中

Q：それで小学校、中学校に入られるぐらい、小学校、中学校について、少し教えてください。遊び方とか、小学校のエピソードでいろいろ楽しいと思いますけど。

岩谷：中学 1 年の時に生まれたところに戻ってきて、それまで家を貸してたみたいですけど。戻ってきて、今度は少しアナログな田舎の状況から少し都会のデジタルなっていうか、そういうところに入ってくるんですよ。そこもでもそんなに、違和感なく入ることができて。

Q：いちおう中学ではピンボールっていうのを伺っていたんですが。

岩谷：あ、中学の後半の時に、ボウリング場の待ち時間のためのゲームコーナーがあるんですけど、そこにピンボールがあって。ピンボールの画面、ガラスの盤面って、すごいデザインが、ね。もう日本じゃないと、アメリカングラフィックスなんで、「うわっ、かっこいい」。もうまさに「かっこいい」なんです。そのデザイン性と、それから銀の鉄球を弾き返すという。そして台を抱えて、ちょっと揺らしながら、「ピピン」、「ピピン」とやっていくっていうスタイルのかっこよさと。ピンボールを抱えてダンスしてるような思いで僕はやるんですけども。

男って、物理ゲーム好きなんです。銀の玉がこう跳ね返って、この入射角で、この反射角で、このスピードで跳ねるとか。まあパチンコもそうですし、コリントゲームもスマートボールもそうなんですけど。スマートフォンの「Q」っていうゲームアプリ、ご存じないですか。スマートフォンの「ピー」って指でなぞって線を引くと、それが物理的にちゃんと落ちていって、指示されたとおりに「この玉をあっちにやって」とかっていう。物理法則に従って、自分で考えてお題をクリアしていく。手でシーソーを描いて、そこに物を落としてやったりとか、そんな感じのゲームなんですけども。

いわゆる普通の昔のビデオゲームでも、何かを発射すると弾が飛んで行って、動いている相手をやっつけるとか。敵戦艦がいたら、「ピー」って行って、要するに時間軸でここで合うように発射を決めるっていう、いわゆる狙い越しですね。物理法則に従った結果よいことが起こる、っていうのが好きなのかなと思ったのはなぜかなって考えたら、原始時代から男は狩りに出て動物を捕獲するわけです。そのとき、槍を投げたり、あるいは石を投げたりっていうことで、物理法則に従って獲物に当たるわけですよ。ですからその辺に長けてた人が遺伝子で残ってるんじゃないかなと思って。

Q：狩猟のときの記憶が。

岩谷：そう。要するに物理法則をちゃんと理解して、ものを捉えてた人種が遺伝子的に残ってるんじゃないかと。

Q：本能みたいなものが残っていると。

岩谷：そうそう。というふうに思うぐらい、やっぱり男は物理的な動作をするものが好き。そういう意味で、ピンボールはまさにそのとおりのもので。で、プラス、めちゃかっこいいっていうので。それで後はそうですね。中学校っていうと。

Q：成績はどうでしたか。

岩谷：成績はほんとにまばらですね。

Q：それは科目ごとっていうことですか。

岩谷：そうそう。数学は、これは学年で1番。だけど音楽は学年でビリに近いほう。美術とかはよかったんですけども、あと英語が駄目とか、国語が中くらいとか、後は何かがいいとかって、ほんとに凸凹した。要するに家で何もしてないですからね。そのまま素が出てるというか、そのまんまの。

Q：その傾向って、あんまり変わらないですか。今さらですかね。

岩谷：今さらですね。その後、大人になってからも。残念なところをちゃんと引き上げなきゃってことをあんまりしないタイプなんで。駄目なら駄目でほっとくというか。

Q：いいところでいうと、算数は、じゃあ小学校の頃からできた？

岩谷：小学校の時は特に何もなかったです。数学は何か、覚える。でもそれは中学までですよ。高校入ってからの数学は、微分・積分に入ったら、もうさっぱり分かんなくなって。数学といっても算数的なやつです。

Q：陸上はやめちゃったんですか、中学校では。

岩谷：陸上は、なかったです。

Q：中学校に部がないんですね。

岩谷：ないですね。テニス部と、それからバスケット部に所属しました。

Q：掛け持ちですか。

岩谷：うん。何かクラブっていても、ほんとに何ていうか、ぬるい感じの。

Q：ちょっとカジュアルな？

岩谷：うん。テニスも軟式ですしね。

Q：軟式テニスは今はかなりマイナーになっちゃったけど、当時は結構メジャーでしたよね。

岩谷：そうですね。

Q：中学は公立ですか。

岩谷：公立です。区立ですね。

Q：じゃあ家から歩いて行く感じで？

岩谷：歩いて。目黒区立第9中学校です。

Q：当時は、1学年が500人とかいう感じのでかさなんですか。

岩谷：いや、そんなに。いわゆるベビーブームの生まれた団塊の世代よりもずっと減ってますから、クラス的にはごく標準的なクラスの数です。クラスの中の人数も過不足なくというか。

Q：30～40人ですか。

岩谷：そんな感じです。

Q：40人が5～6クラスみたいなイメージですね。

岩谷：そうです。6クラスぐらいですか。A、B、C、D、E、Fで、6ですね。

Q：行動範囲はどれぐらいでしたか、中学校の時。東京の都心のほうに遊びに行ったりとか。

岩谷：あまりないです。東急、東急系のところしか使わないです。当時の目蒲線と東横線と田園都市線ぐらいしか使わない。

Q：あと東急沿線とか。じゃあ秋葉原で機械に手を出すとか、そういうところまでは行かない？

岩谷：アキバが全くそういう町じゃなかったような気がするんです、当時はまだ。

Q：今のような町とは全然違うと。

岩谷：ええ。渋谷とか新宿だとかに中学の時は遊びに行くっていうことは、あんまりないですね。ファッションとかは興味ないですから、買い物に行くっていうのはないですし、ディズニーランドに行こうっていうのも、ディズニーランドもないですから。

Q：そうですね。まだない時代ですよ。

岩谷：後樂園に行こうとかっていうのはあるのかな。ないですね。中学校は何をやったかな。

Q：もともと東京だし、その東京憧れみたいなのも、あんまりないですか。

岩谷：ないですね。

Q：変な聞き方ですけど、東京に帰ってらっしゃった時は、何か「ああ、帰ってきたな」っていう感じなんですか。それとも「ああ、帰ってきちゃったんだ」みたいな。小学校までは東北じゃないですか。

岩谷：やっぱりなじみやすい性格なんで、そういう差があんまり認識できないタイプなのかもしれないですね。あ、でも中学校の最初の時は、東北から戻ってきたというか、「来ました」とか言ったら、「かっぺ」とか言われて。それで俺も「なまってもないのに、何だお前」って。やっぱりちょっと差別化しようというか、する人がいて。差別っていうか。それはもう数カ月。

Q：逆に、ずっとそれこそあれですよ、東北弁にならなかったっていうことですよ。

岩谷：そうです。なかったです。全くなかったです。

Q：向こうでは、東北では大丈夫っていうか。

岩谷：多分、普通の言葉をしゃべってました。

Q：合わせてた？

岩谷：いや、標準語です、いわゆる。

Q：結構、秋田も岩手も、方言あると思うんですけど。

岩谷：「んだ、んだ」ぐらいは、多分、言ってたと思うんですけどね。

Q：何か嫌な聞き方ですけど、結構それが言葉が違くと仲間になれなかったりとか。はじかれたりっていうことがあるじゃないですか。そういうのはなかった？

岩谷：なかったです。東京から秋田へ行った時もなかったですし、仙台から東京へ行った時もなかったです。しゃべってる言葉がなまってなかったからだと思うんですけど。

Q：すると、今、渋谷とか繁華街にはいらっしやらなかったとすると、碑文谷とか、あそこら辺の辺りのボウリング場とか、あと友達の家とか、学校とかっていう生活圏ですか。先ほど、ピンボールとの出会いがボウリング場だっておっしゃいましたけど、中2、中3ぐらいですか。

岩谷：そうです。中2、中3ですか。

Q：そうすると、勝手に計算すると68～69年かなと思うんですけど、ボーリングブームは関係ないですか。

岩谷：ブームの時ぐらいじゃないですか、ちょうど。

Q：で、ボウリング場にいらっしやったっていうふうに理解していいんですか。

岩谷：そうです。ボウリング場に行くのは、ボウリングしに行くわけではなくて、ピンボールをしに。

Q：最初からそうなんですか。ボウリングをみんながしに行こうとか、流行ってて。で、行ったらピンボールがあったっていう？

岩谷：ではないです。

Q：ではないんですか。

岩谷：ボウリング代を出すほど、何かお金の余裕がなかったと思います、多分。アルバイトもできないですから、中学生の時は。

Q：当時ピンボールいくらですか。

岩谷：1 ゲーム 30 円かな。ビデオゲームができて 100 円になったんです、ゲームの料金っていうのは。

Q：さらに変なことですが、お小遣いはいくらでしたか。いや、30 円のピンボールが何回できるのかな月によって。

岩谷：私、お金の感覚、駄目なんです。例えば何か今でも物を買うでしょう？ 「いくらしたの？」って言われたら、「分かんない」っていう、そういう感じなんです。だから、例えば本屋で本を買うでしょう？ いくらになってるか分かんないから、手持ちオーバーしたりなんかよくするんです。だからお金はほんとに駄目なんです。

Q：月ごとにお小遣いはもらってたということですか。

岩谷：もらってたと思います。

Q：そうなる結構ピンボール、実際にできたんですか。見てた？ それとも。

岩谷：いや、やってみました。

Q：最初のピンボールのきっかけって何かなっていうのを少し。

岩谷：多分、ボウリングっていうものが流行ってるんで、誰かが「やる」って言って、行って、こうやって見てたんじゃないですかね。で、後ろ向いたらゲーム機があるというよな。

高校時代：生活環境の変化

Q：続いて高校に入ってからも、少し。中学時代にピンボールというお話がありましたけど、高校ではいかがですか。

岩谷：高校の話は、めちゃめちゃドラマチックな高校なんで。高校がまず選べなかったんです。学区制って言って、その地域の 3~4 校の群で受けたんです。群で受けて、その中には目黒高校と都立付属高校と玉川高校があつて。群で受けて、その点数によってどこかの高校に、順々に振り分けられるんです。23 群だったかな。もう今はその群制度はないんで

すけど。で、都立大学付属高校という高校なんですけども、名前だけが都立大学付属で全く大学とは関係なくて。大学の敷地の中にあるという、そういう都立高校です。で、入った途端、例の学生運動の最後の残り火みたいな時期ですので、入学式とかが先輩学生たちのヘルメットかぶった人たちのあれで阻止されるわけです。

Q：それは、いわゆる講堂とかが占拠されちゃって使えないと？

岩谷：そうです。要するにロックアウト。授業も最初からロックアウトで。先生が来て教える場面でも、ヘルメットかぶった人が、もうとにかくアジテーションばかりしてます。「われわれは、何々の」って言って、やって。それで授業が、ほとんど受けるような感じじゃないんです。定期試験、学期末試験とか中間試験とか、いわゆる定期試験っていうのも、「これは、そういうような評価で決めていくっていうのは、体制に何かしてるんだ」っていうことで、定期試験を廃止させられたわけです、学生たちから。ですから授業のほうも型どおり授業するんですけども、成績のほうはレポート提出で単位を取っていくというもので、そんな感じでやるんですけども。だんだん授業に出なくなるんですよ。

都立大学っていう東横線の駅とキャンパスの間には雀荘があるんです。雀荘はその大学生がよく使うようなんですけど、そこに出入りするようになって。ずっと雀荘で遊んで、麻雀やったり、プラプラ、ほんとにプラプラしたりとか。あとパチンコです。パチンコをやったりとか。駅前のパチンコで、開店で行列して待ってるわけですよ、いろんな人が。われわれもこうして待ってて、良い台を早く取りたいというので。待って、行列でパチンコ屋のお店が開くまで、普通に登校する仲間たちがいるわけです。その人に「あ、今日、代返頼むね」とか、そういうような話で、パチンコやったりとか。ほんとに不良、いわゆるプチ不良の3年間だったんで、昼間からロック喫茶っていう。いわゆるロックを掛けて暗くしたような。

Q：今のお話って、高校生の頃ですよ？

岩谷：そうそう。

Q：ほとんど大学生ですよ、それは。その授業妨害していた人も、ヘルメットかぶってた人も、高校生だったってことですか。

岩谷：そうそう。高校生。だから高校生、要するに大学にも、もちろんそういう人たちもいるし。

Q：でも高校までその波が押し寄せてきたってことですね。

岩谷：そうです。

Q：だから教えてるやつがいたんですね、その思想を。

岩谷：そう。だから、アジテーションしている中を抜けて、校舎の中へ入っていくという。

Q：今、プチ不良とおっしゃいましたが、いわゆる不良じゃないですよね。

岩谷：要するに大きく外れたというか、何か事件を起こしちゃうようなという感じではなくて、お遊びですよ。

Q：学校とか親からは怒られたりとかはなかったですか。

岩谷：もうしょっちゅうというか、呆れられてたっているか。

Q：当時、不良仲間みたいなのがいたんですか。

岩谷：不良仲間っていうか、プチ不良仲間はいますよ。今でも付き合っていますよね。この前、同期会っていうか同窓会があった時も私たちが幹事をやって。封筒に、みんなで集まろうっていう時には、「われわれの一」って書いて、やったんですよ。その同期会の最後の締めのは、自由で乾杯！とかね。当時は自由っていうものを求めるっていうか、反体制っていうか、そういう。僕もヘルメットかぶって角材持って、やったんです。ただ、それも思想的なことは全くなく、体制に反対するっていうことの流れで参加してたっている。

Q：何か形から入っちゃみたいなの？

岩谷：そうですね。

Q：何となくこれがいいんじゃないかって。

岩谷：身元を明かすものは持っていったらいけないと。お尻のジーンズのポケットに歯ブラシ1本だっている、そういう形で。要するに捕まっても。

Q：ばれない？

岩谷：うん。

Q：これはもう入学当初から？

岩谷：当初からです。あとは、渋谷とか新宿とかっていうのは、もう。あと自由が丘です。この自由が丘、渋谷、新宿が、われわれの遊び場でしたね。そこでようやく発散的なことに興味を持つようになって。定期試験がないんで、レポート提出になってくると、社会とかそういう科目においては、当時の公害問題、かなりあの時はヘドロであるとか工場からの流し放題の時期ですから。そういう意味で、瀬戸内海のほうのカブトガニが、生きた化石もやられてしまうんじゃないか、というようなことをテーマにレポートを書くぞっていう気持ちになって。そのためにはいろんな調査しなきゃいけないっていうんで、自民党本部に行って。自民党本部に行って、まあ議員の方に直接会えるとは思わなかったんで、秘書の方が対応してくれたんです。そこでヒアリングをして、書いて。その自民党に入るにも、もうこんな身なりでしたから、鞆の中なんかをチェックされるわで、こう入って。で、レポートを仕上げてとか。

そういう意味では、普通の高校生ではないようなこともできたっていうんで、高校時代の3年間は非常に感謝してるんです。いろんな意味で感性を研ぎ澄ますことができたし。そのロック喫茶っていうところも、夕方近くなるとサラリーマンが来るわけですよ。そうすると、サラリーマンの人からいろんなことを教わるんですよ、会話の中から。そこからいろんなものを垣間見られたりとか。

Q：先ほどちょっとおっしゃいましたが、中学までと高校からがガラッと変わったような気がするんですけど。

岩谷：そうですね。変わりました。やっぱり高校の、あとは時代というものがあつたと思うんですけど。それで、その当時に見たアンディ・ウォーホルの映像、テレビでやってたんです。それを何か朝の番組でチラッとテレビ見たら、いわゆる何もない空間で裸のランプが揺れてる、影がこういうふうになるっていうだけをジューッと映してるんだけど、アンディウォーホルらしい映像作品なんですけど。それを見て「こういうのも芸術になるんだ」っていうのは、そんなような思いはありました。でもその見入ってしまう魅力っていうのは感じましたよね。そこに映し出されているものっていうのは、非常にシンプルな単純化した記号の芸なんですよね、影が揺れるっていうだけの。そういう意味で、ごちゃごちゃと塗りたいものじゃないシンプルな表現っていうものが、ちゃんとアリなんだなっていうのが分かって。のちのゲーム作りの中においてはシンプルに、ルールもデザインもシンプルに、というのはありました。

Q：結構その、小学校の時には電車の、漠然と電車の運転士さん、漠然とっていうことで、このぐらいになってくると、だいたい将来も見えてきますよね。将来が見えてくる。「将来こうしたい」、「こうであるのかな」みたいなのは、いかがですか。

岩谷：その後、その「電車運転士になりたい」というのがフェードアウトというか、だんだん萎えていって、何も見えなくなってから、じゃあ何かできたかっていうと、何もできてないんですよね。

Q：「何になりたい」とか、「こういうことをやろう」とかっていうのも、むしろ今おっしゃったように、いわゆるほんとに社会勉強。

岩谷：そうですね。今、渋谷の昔のパルコの、小さな路地で坂になって上がっていくところありますよね。今は何かスペイン坂とか何とか。

Q：NHKのほうに向かって上がる坂ですね。

岩谷：そうそう。あれ昔、何もなかったんです、店も何も。単に坂があって。パルコもなく、坂があって、連れ込み旅館があったんです。その連れ込み旅館のところに、ちょうどいい腰掛けられるようなところがあって、われわれも入っていく人たちの様子を見てるわけですよ。年の離れた、若い女と年老いた男が入っていく様を見て、「ああ、こういう社会なんだ」と、社会っていうかね。「そういうもんだ」と。

大学受験：東海大学に入学

Q：進学準備とかは、もう高校に上がってから考えたんですか、大学行きたいっていう。

岩谷：いや、大学は行くだらうなと思ったんですけど、例のとおり、英単語とか英語をスペル覚えるために書いたりってことをやったことないんです。全部ほとんどがレポート提出なので、いわゆる受験勉強は皆無なんです。それで11月か12月になって、「あんた、大学どうすんの」とっていうふうな家族会議みたいなのがなされちゃって。

Q：それは3年生ですか。

岩谷：そうそう。

Q：ほんとに結構ギリギリですね。

岩谷：そう。ギリギリ。だから願書出す。

Q：もうリミットですよ。

岩谷：そう。願書出して、「あと数カ月勉強するんだよ」っていう、「しなさいよ」って言われて。もっと前か。3カ月みっちり勉強したんです。

Q：じゃあ10月とか。

岩谷：そう。ぐらいかもしれない。そこでも努力っていうのをしましたね。要するに、国公立の5教科とかっていうのは無理だから、私立の3教科っていうことになって。自分の入れる、今から頑張ってもってということで、日大だとか、芝浦工業大学とか、東海大学とか、そういうところをターゲットに、3カ月で3科目を3年分やるっていうので計算したんです、教科書とか参考書を見て。そうすると「1時間に何？ 10ページ？」とか、こんな感じで。入った大学がそんなに偏差値の高い大学じゃないので、いい点が取れなくても入れたっていうところで、入りましたね。

Q：でも1日何ページっていうのは、これは全部計算してみて。

岩谷：計算はしたんで。

Q：何で東海大学で、かつ工学部なんですか。

岩谷：一番最初に決まったんです。要するに、受験は何校か予定されてたんですけども、一番最初に合格通知が来たところで、「あとはもう受けなくていいや」って、そういう。

Q：工学っていうのは別に特段？

岩谷：工学部の通信工学科っていうのは父の影響です。NHKだから、そういった方向かなって。

Q：私、そうはあんまり思わないです。今ちょっと関連してお伺いしたいのは、今、芝浦工大とおっしゃったけれども、工学系とか、理系、いわゆる理系、文系とかって、そういうのはどういうふうに考えられたのかなって、当時。

岩谷：中学の時、数学がよかったので「理系だろうな」っていうことと。あとやっぱり父

と、あと兄が理系だったので、「まあ、理系なんだろうな」と、もう漠然と。親の方向、兄の方向っていう、そんな感じで。

Q：じゃあ、工学で何か物を作りたいとかっていうお考えは？

岩谷：ないです。

Q：入るとしたら、お父さんとかお兄さんの影響があったところみたいな？

岩谷：そうなんです。ですから、今思うとゲームは芸術系と、それから面白いということとか、物語性を考える人文科学的なこと、いろんな機械、いわゆる電子工学でゲームを作っていく、あるいはロジックでゲームを組み立てていくっていう理系と、理系・文系・芸術系、3つ適宜バランスよくというか。うまくできたから、ゲーム会社で力が少しは発揮できたのかなと思います。

Q：でも逆に言うと、だから芸術とか人文とかっていうのは、当時、あんまり考えられなかったと？

岩谷：考えてないですね。

Q：高校生ぐらいの時は、将来の何かイメージとかって、あったんですか。

岩谷：ないです。

Q：サラリーマンとか。

岩谷：サラリーマンとかですね。会社を興すとか、そんなのは何も考えてない。

Q：何か失礼な聞き方ばかりで恐縮ですけど、大学に行かない友達も結構いますよね、まだ当時だと。

岩谷：そうですね。高校の友達には。

Q：プチ不良仲間もそうだと思うんですけど。

岩谷：そうです。

Q：だから、大学はどうしても行かなきゃいけないってわけでもないですね。

岩谷：でも、みんなほとんど大学行ってましたね。彼らも同じようにやってたのかな、追い込みを。

Q：結果的には、ですか。それこそ友達と「お前、どうする？」とかって話は？

岩谷：しないですね。しなかったですね。

Q：じゃあ先ほどの家族会議で？

岩谷：家族会議でコテンパンにやられました。「お前は何を考えてるんだ」と。「考えてません」と言うわけにもいかないので。ほんとに注意してきたのは、よっぽどこのままだと駄目だなんていうのを、外から見て分かったんでしょうね。

Q：ずっとおっしゃってますけど、それまでは基本放任で「好きにやれ」って感じだったのが、さすがにここでは。

岩谷：そうです。ここでは言って、入った後はまた放任ですからね。